

郷土の偉人

森川源三郎

二、知られざる活動



明治35年九州巡回時(58歳)



図：九州開墾指導紙芝居「森川源三郎翁伝」から

貯金奨励等の遺徳を顕彰する石碑
(内浜田の
稲荷神社境内)



長年愛用した手製の籠籠の口に布ぎれを縫いつけ、ヒモを付けたりしているところに丹念な性格がにじみ出ている。左の籠は九州にも持参した。

商工会の設立

森川源三郎は農業以外の分野でも様々な活動を行って地域住民の生活改善に尽力しています。商工業振興のため商工会を設立したこともその一つです。

明治時代の中頃、新屋村は年々不漁続きのため北海道その他へ移住離散する者も多く、人口は明治初期に比べて二割以上も減少する有様でした。森川翁はこれを憂い、明治二十九年、新屋商工会を組織して自ら会長の任につき、白玉粉、馬鈴薯澱粉、麺類、しみ豆腐の製造を奨励するとともに、自宅内にメリヤス製造工場を設けました。

九州巡回指導

明治二十七年と同三十五年の二度にわたり九州を巡回して講演と農業指導を行ったことは、石川理紀之助の功績として有名ですが、森川翁も二度とも同行し、農業指導を行っています。

巡回講演会では、はじめに秋田なまりのため内容がわからない箇所は講演後に質問するよう話すなど、思わぬ苦労があったようです。これらのことは丹念に記され、記録として残っています。

婦人会と墓地掃除組合設立

家庭の教育は主婦の教養によることが大きいと考え、また家政の維持、子

弟の教育、村里の気風を高めるのは婦人の力であると信じ、明治三十年、新屋婦人会を創設しました。翁は毎回のように会合に出席し、子どものしつけ方や家政勤儉などを説き、婦人の知徳を高めました。

また、世情の進展に伴い、人情が軽薄となっていくことを歎き、明治三十年、墓地掃除組合を組織して、常に祖先の徳を忘れないように尽力しました。

貯金奨励と凶荒予備

農家が次第にぜいたくに染まり、ついには困窮におちいる者がいることを歎き、ムダな出費を少なくして貯金の必要性を説きました。当時、貯金の習慣がなかった人々に理解してもらったことは至難の業であったと思われ、巡回日数が千八百余日に及びました。

さらに、凶作に備えるため、食糧の貯蔵の必要性を説き、自ら常食用の余分を貯蔵するとともに、浜田村内浜田に救荒予備倉を建設させました。
(秋田市文書法制課・歴史資料担当)

明德館のごあんない(平成23年度)

◆開館時間

平日 午前9時～午後7時
(ただし7月は午後8時まで)
土・日・祝日 午前9時～午後5時

▼お詫び

第73号の誌面に訂正があり、発行が遅れましたことをお詫びいたします。